

## 三つの企みで思ったこと

大場 真護

三年前、ふとしたことから「インプロ×OKAYAMA」の立ち上げにかかわった。「即興文化をこの岡山の地に広め、根付かせたい」との願いで、次のような活動が展開された。

- ・毎月のインプロワークショップ（以下、WS）
- ・特別講師によるWS
- ・「インプロ研究大会」～インプロの教育的効果～
- ・私立高校音楽科・表現授業（インプロによる）
- ・神奈川県私立中学校で中1担任むけWS

そして、今年度には、

- ・三つの公的機関と連携したWS（年間15回）
- ・全国生涯学習フェスティバルでのワークショップ

等といった計画が進められている。

私はWS（講師：絹川友梨）に参加し即興演劇を「五十の手習い」にて楽しみながら、「イエスエンド」の思想に触れ、刺激的な時間を過ごしてきた。その一方で、WSを展開していくに際し、この地域の多くの方々（多方面に亘る）に出会い、そこから気がつけば、いくつかの企みに携わるようになった。

### 三つの企み

昨年神無月から今年の弥生までに、三つのイベントを企画機会が与えられた。三つにはなんの脈絡もなかったが、その準備の途上、そして終わった今の時点で、多くの気づきがあった。三つの企みの具体的な説明の後で、その振り返りをまとめてみたい。

「龍神祭」(玉井宮東照宮) / 10月22日

宮司から「秋の例大祭を少し賑やかにし、神様に喜んでもらえることは出来ないか」との依頼があり、『龍神祭』と銘して行った。

- ・山三景が龍の銅で、玉井宮は頭との見立てがある。
- ・白龍(氏神)、金龍(東照宮)が祀られている

といったことから、「龍神祭」という言葉が浮かんだが、それが実感できたのは、一人石段の降り口に立って拝殿へのゆるやかな参道を見上げ、石段が下に連なる光景を眺めたときであった。「龍そのものの形だ」。そこから、「拝殿・神楽、参道入り口・太鼓、石段・映像(プロジェクター)、石段下り口・大道芸」を配した。表現者をお願いしたのは、「龍を感じ、即興的にそれを表現し、立ち上がらせて戴きたい」ということだ。拝殿には、「白龍」(約15m)が鎮座し、約2,500人が参拝された。今年からはさらに「龍笛」「龍鈴」、そして「短歌、俳句、書道」等の県内の「龍」に縁があるの方々にお声をかけていくことになっている。

「林三従七回忌」 / 12月17日

夏に「林三従ミュージアム」を訪れた折に、義妹の方から「七回忌」を依頼された。生前お会いしたこともなく、「遺作集」に少し触れただけであったが、三従さんの次の言葉に惹かれてお引き受けした。

# theatre & policy

no.42

シアター&ポリシー 通巻42号  
2007年4月20日発行  
編集・発行人 中山夏織

特定非営利活動法人  
シアタープランニングネットワーク  
〒182-0003  
東京都調布市若葉町1-33-43-202  
Phone & fax 03-5384-8715  
e-mail tpn1@msb.biglobe.ne.jp  
http://www5a.biglobe.ne.jp/~tpn/

「イベントという言葉は本来ARTのジャンルの表現形式として用いられたもので、それはまさに『出来事 (incident)』もしくは『事件の発生 (occurrence or happening)』であって、日常生活のレベルの中で偶然起きる緊張感をはらんだ違和感的な様の意味を示す。ところがここ数年来の「イベント・ブーム」によって、今では人々を寄せた祭り騒ぎ(エンターテイメント、フェスティバル)の様相を表す『行事』になってしまい、意義や理念は見失われた。」

岡山(備前)の地で、十数年に亘り「インプロヴィゼーション(即興)」をベースに置いたイベントを続け、多くの饒舌なる言葉を残し突然逝去された三従さんの七回忌としてふさわしいものとして、「激しさを内に秘めながらの静謐な時間が流れていく。それをピアノ即興家とダンサーによって表現していく。デスマスクの彫像と備前役の灯籠が座する」が、突然頭に浮かんだ。それは偶然東京に送られていた「デスマスク(亡くなる直前に友人の彫刻家に依頼されたもの)の彫像」が送り返されたことを知った直後であった。昼、夜のイベントに各30人の方が「ミュージアム」を訪れた。

「ルネス(旧日銀岡山支店)を遊ぶ」 / 3月21日

年12回の催しを行うルネスクラシック委員会の会員として、ホールでは初めての即興演劇を中心に企画を行った。「インプロ×OKAYAMA」「ハート・アート・岡山」の代表(共催)とともに、実行委員会を立ち上げた。お願いしたのは、「時代の変遷と建物の持つ意味などを感じながら、『ルネスを遊ぶ』をテーマに企画していただきたい。つまり、『ルネスで遊ぶ』(自分たちがやったこと、やりたいことを持ち込む)のだけでなく、『ルネス(そのもの)を遊んで戴きたい』」ということだった。

約半年の準備にて、昼:即興ソング+巨大紙幣、夜:即興演劇(ホールをレストランとして見立てて、絹川友梨、川戸貴文、歌島昌智等が出演)といった内容で、計200名余りの方に楽しんで戴いた。加えて、「外に向けて発信し、電車からもその模様が見えるようにして戴きたい」という要求も、出入り口のガラス(約8m×6m)にプラスチック紙を針、それに昼と夜の映像が流れることで実現し、多くの方に好評であった。

企みの中で思ったこと

前もって

「即興」を中心にした表現で。

僕の社会への接点が「インプロ」を通して始まったために、それへのこだわりがあり、また、「場」はその地特有の歴史と文化を有するがゆえに、「地域で文化を創造する」原点として、「その場を感じ、そこから表現する」といったインプロの精神が存在すると考えていた。即興で表現するには、相当の技量が要求されるのではあるが、「その場で立ち上がる」ことを大事にして欲しいことをその都度お伝えした。

やっていく中で。

「形なきもの」にも喜んで戴く。

「玉井宮の祭り」の前後には、「龍」を肌で感じた。これは僕だけの体験ではなく、最初の実行委員会の折になにげなく空を見上げたメンバーが、「あ、龍がいる」と叫んだことにもいえる。そこには「虹」と「雲」が合体した「龍」が現れていたのだ。また、祭り当日には、曇り空で時々小雨、終わるとザーと強い雨。誰かが「龍が喜んでいる」と言った。龍は雨の神様である。

「三従七回忌」では、準備の過程で何回か通っていた折、空気が澄んできた。即興ミュージシャンの歌島さんが「最初すごく重たい空気だったのに、当日には澄んでいた」とコメントしている。僕は三従さんのデスマスクの彫像(それを頭にして服を着せたかのようにミュージアムに服を敷き、靴を履かせ、そこに生前好きだった赤いバラが訪問者から献花されるという趣向がこらされていた)と一人で向き合った時に、目玉が現れたのには驚かされた。が、「あ、喜んで戴いているんだ」と思った。

「ルネスホール」での「ルネスをあそぶ」という言葉が浮かんだのは、一人でホールの

真ん中において全体を見渡したその瞬間だった。「この建物を創った全ての方が喜ぶために、ルネスをあそべばいいな」と思ったのである。ほとんどの方は死者になっておられる。役者の川戸さんが打ち上げの折に、「最初、旧日本銀行だと思って、その荘重さが嫌だったけれども、リハーサルの途中で、『ここで苦勞して、生き死にした人もいる』と思ったら、俄然やる気がでてきた」と語った。同意し、嬉しかった。

弥生のおわりに。

自分の立つところは「文学」でいい。

この半年に多くの音楽家、美術家等とであったが、手に「創造する術」を持たない僕は、彼らと係わるのに、はっきりとした言葉を持たないままだった。「実行委員長」の類ではなく、自分を納得させる背景のようなものである。ある日、三従さんの遺作を届けてくれた人の言葉を思い出した。「文学こそ全ての芸術の根幹にあると思う」。

「始めに言葉ありき」。だから僕は、「地域で文化を創造する」に当って、その場にふさわしい言葉を吐けばいいのだと思った。その瞬間から、実にすっきりし、肩の力が抜けた状態で、「ルネス」に係わることができた。

そこから思う。地域に文化を創造するのに、文学は今どの位置にいるのだろう。文学はなにも「小説を書く、読む」だけのものではない。その場にゆかりの作者の作品を取り上げれば、「文学」がその地域で甦るものでもない。「その場」に「言葉」で立ち上がっていく、その営みも文学と言えるのではないだろうか。

それぞれの地域には「音楽、アート、ダンス」といった芸術活動を続けていらっしゃる方がいる。そして、コラボレーションも多く試みられている。「文学」に親しんできた方（例えば、大学の文学部出身者等）は、それらにどのように関わっているのだろうか。

今年も三つの企みは形を修整しながら続けられるだろう。そして、今後、この岡山の地のどこかに立った時に、「文学の世界」が感じられれば、新たな企みをはじめたいと念じているところである。（おおばしんご/インプロ×OKAYAMA）

## あうるすぽっと < 豊島区立舞台芸術交流センター > 開館記念 アートマネジメント研修生募集

あうるすぽっと《豊島区立舞台芸術交流センター》は、豊島区にとって区立による初の本格的な舞台芸術の拠点であり、池袋副都心のにぎわいの創出と地域文化の新たな創造を目指す劇場です。高品質な舞台芸術を中心とした文化芸術の創造・発信とともに、多彩な演劇ワークショップによる人材育成やアウトリーチ型の事業展開を図るなど、アートの視点からのまちづくりに積極的に参画し、文化的な地域コミュニティの形成を目指しています。このたび開館記念事業として、アートマネジメントでのキャリアアップを目指す方々に門戸を開き、「劇場の開館事業」という大変稀有な機会を提供し、実践を通して学んでいただくインターンシップを企画しました。

- 【研修内容】 豊島区立文化芸術交流センター開館に関わる準備から開館記念事業全般に参画することで、第一線のクリエイターらとともに現代演劇の創造とその運営、公立劇場が担うべき社会的責任としての啓蒙・教育事業に関わるとともに、文化行政全般を学んでいきます。6月から7月にかけて、研修生のための特別講習も予定しています。
- 【採用予定人数】 若干名（最大6名）
- 【研修期間】 2007（平成19）年5月31日～12月31日
- 【応募締切】 2007（平成19）年5月1日（火）必着  
詳細につきましては、<http://www.owlspot.jp> をご覧下さい。

- 【お問合せ】 あうるすぽっと < 豊島区舞台芸術交流センター > phone: 03-5391-0751  
（平日 9:00～17:00）e-mail: [tcom0503@a.toshima.ne.jp](mailto:tcom0503@a.toshima.ne.jp)（担当：ヲザキ・小沼）

# シルヴィア・ダウのツールキット

## 芸術が拓く

### シニア世代の創造性と学習

第2回

はじめ

芸術を学習に持ち込む、あるいは他の学習機会の旗を掲げるために芸術の活用をはじめするには、考え準備すべきことがいくつかあります。コラム内の「C」のリストはそれを支援するものですが、このリストにはない、二つのCもはじめるにあたって重要なものです。それがコンピクシオン（確信・信念）とコミットメント（関与）です。

#### C リスト

- ・ コンサルテーション
- ・ コラボレーション
- ・ クリエイティビティ
- ・ コーディネーション
- ・ キャッシュ

#### コンサルテーション

いかなる事業も、ささやかであっても、きちんとしたコンサルテーションなしに参加者と一緒にはじめることはできませんし、すべきではありません。このことは特に高齢者を伴う事業に真実です。というのは、子どもたちと同様に、「私たちは」何が最良かを知っている、そして「彼らは」自分たちのために考える能力を持たない、としばしば決めつけてしまっているからです。

例えば、芸術で高齢者たちがやるのを好むのは、つねに過去を振り返る、つまり「回顧プロジェクト」として知られるものと決めつけられることがよくあります。個人的なルートをたどる回顧プロジェクトは地元あるいは国の歴史を人々に紹介するには、本当に優れた方法です。人々を個人的な歴史と自伝の経路に案内し、それを通して歴史的事項の大きな流れに導く、この種のプロジェクトはたくさんあります。しかし、特定の集団が、あるいは個人が求めるものが、それだと決めつけてはいけません。高齢者たちは過去と同様に、未来をもつ正当性を考えているのです。高齢者たちはポピュラー・カルチャーや現代的な事象に関わるのを望んでいるかもしれない。彼らはエンテレーナー・アーツで高齢者プロジェクト担当するジュリア・ホーネスの見解に同意するでしょう。

「地域で、しかもプロでない芸術プログラムが高齢者を対象とするとき、定義で言えば、過去に焦点を置き、あるいは『古き良き時代』を思い起こすといった決まりごとを採用した回顧プロジェクトであることが多い。高齢者たちは自らの関心をとてもしばしば若い世代の芸術家のプロジェクトのテーマや、庇護されている芸術、あるいは真面目に捉えられていないものに見いだしているのです。」

高齢者に聞かなければそれを知るのは不可能なのです。だから、結局、活動の消費者となる人々の声を聞くことこそが最初のステップであり、「私たち」は「彼ら」がやりたいこと、喜んでやること、関わりたいと考えているのかを聞かなくてはならないのです。

コンサルテーションはトリッキーな作業です。コンサルティングをしながら、考えなければならぬのは、自分が本当に聞いているのか、そして自分が聞いたことに対して本当に応じようとしているかであり、また、何が可能であり、何がそうでないのかを認識しなければなりません。自分が考えているクオリティや提案の野心がどのようになるべきなのかに率直でなければならず、また自分たちが担いとうと考えることについても正直にならなければなりません。

コンサルテーションにも、情報を得るだけでなく、興味あるプロセスにしよう創造的なあり方があります。例えば、ある集団が創造的な方法でアイデアや意見を表現するのを助けるために、俳優やヴィジュアル・アーティストを使うことは、光明を投じるとともに、その芸術形態のためのある種のテストにもなります。この種のテクニックは個人に対してよりも集団に対してより効果があります。

シルヴィア・ダウ  
Sylvia Dow

アーツコンサルタント。  
スコットランド生まれ。俳優、ドラマ教師、マックロバート・アート・センター（スターリング大学）のエデュケーション・オフィサー、自治体の芸術担当官などを経て、1995年から2004年、スコットランド芸術評議会エデュケーション部長を務め、様々な芸術と教育プログラムに着手。定年退職後、フリーランスとして芸術と教育の振興のためにスコットランド中を駆け回る。余暇には市民オペラの演出にも携わる。

しかし、コンサルテーションをする以上、その結果を無視することはできません。焦点をうまく絞り、よく考えられたうえで十分にリードされた継続的なディスカッションは、豊かなディスカッションへとつながり、どこかのプロジェクトの諸事例は、プロジェクトの計画と遂行に大きな利益をもたらす議論のきっかけとなるでしょう。

コンサルテーションはまたプロジェクトの期間中ずっと継続されていかなければなりません。新しいアイデアや意見がコンスタントに持ち込まれ、起こっていることに誰もがハッピーであるかを確認するためです。コンサルテーションは、一つのプロジェクトが異常な負担（あるいは詐欺）にならないようにするカギであり、トップ・ダウンの決定ではなく、協力的な作業なのです。

<< 答えを導き出す問いかけ >>

- ・この集団／人にとって、個人的かつ学習のニーズとは何ですか？
- ・この人／集団にとって、私が踏み込んでいける関心事項は何ですか？
- ・この人／集団に私がもたらしうるどんな種類の学習が、満足を提供し、かつ、個人的な発展や学習成果を提供しますか？
- ・どんな種類の芸術活動がこの人／集団を学習の経路に導くのを助けられるでしょうか？

## コラボレーション

コラボレーションは、パートナーとしての活動の別の言い方です。そして、それが意味するのは、最初のカギとなるコラボレーションは、あなたがいま一緒に活動している個人や集団とのものだという事です。高齢者たちがあなたがここに一緒にいるということ、また高齢者こそが自分たちの学習の所有者だと感じなければなりません。

いったん、どの芸術形態、芸術活動を活用したいかを決定したら、助けてくれる協力者を探しましょう。情報の提供や、また資源や助成をもって、あなたの計画を実りあるものにするためにサポートしうる人々や団体があります。

大切なことは、提供される体験のクオリティであり、このクオリティのためにプロの指導と優れた運営が必要とされるのです。だからこそ、パートナーにふさわしい人物、素材、アドバイスを見いだすことが不可欠なのです。しかし、パートナーシップは、言葉が意味するあらゆるものであり、パートナーのアジェンダに対しては自分自身のアジェンダと同様に、答えられなくてはならないのです。

どんなパートナーが助けになるのでしょうか？

(スコットランドでは) 多くの情報、アドバイス、支援を、地元の芸術・レジャー・文化サービス担当セクションから得ることができます。アドバイスを与えるとともに、一緒に活動する芸術家を探すのを手伝い、助成の財源や、芸術家に払われる金額、芸術団体のコンタクトなどを見つけ出し、他の同じ目的を持つグループや個人をつなぎ、芸術プロジェクトのマネジメントのあり方を教えてくれるでしょう。ときに、そのセクション自体が、役に立つ資源やテクニカル・サポートといった資源をもっていることもあります。

また、地域ならびに国家の芸術機関も役に立つでしょう。スコティッシュ・スクリーン(スコットランド映画協会)やミュージアム評議会、スコットランド芸術評議会もコンテキストに即した芸術についての情報、芸術団体、アーティスト、文化遺産の専門家の膨大なデータベースを持っています。調べるに値する助成情報も備えています。

ソーシャルワーク、教育、あるいは健康(厚生)委員会などとの共通の地盤を見いだすこともまた、実りあるコラボレーションへとつながります。このようなコラボレーションこそが、新鮮なアイデアをもたらす方策であり、ときに助成へとつながっていきます。(次号へ続く)

成功するコラボレーションのための6つのキーワード

- ・ 聞く Listen
- ・ 学ぶ Learn
- ・ 分かち合う Share
- ・ 支援する Support
- ・ コミュニケートする Communicate
- ・ 助け合う Co-operate

# 英国演劇と「身体性」

英国ドラマ教育&トレーニングを考えるための試論

第8回 インターバル 期待と現実

中山夏織

このところロンドンを訪れる度に戸惑うのが、身体性ということより、むしろヴィジュアル・イメージあるいはテクノロジーを駆使した作品が増加していることである。自然主義的台詞劇、あるいは古典劇のスタイルといった本来の強みに、テクノロジーの時代としての「現代性」が加わっているのなら、それもありがちかと思う。だが、ナショナル・シアターも含めて、奇をてらいすぎる、消化できていない状態であることが少なくなく、結局のところ、演出家のエゴが露呈するだけの「実験的」作品に留まってしまふ。何かがおかしい。

英国の文化政策は長く「実験的なもの」を否定してきた側面を持つ。だから、英国にはアヴァンギャルドが育ってこなかった。それがナショナル・シアターのような「メインストリーム」かつ「エスタブリッシュメント」の場でやれるようになったのは、ある意味では、文化政策の転換を意味するし、それがブレア政権のおかげであるかどうかは別だが、芸術にとって健全なことかもしれない。EU統合のコンテキストでいえば、少しばかり、ヨーロッパの大陸の空気が流れ込んできたといえる。それにつけても、ロイヤル・シェークスピア・カンパニーに「捨てられた」、かつてのロンドン本拠地パービカン・センターが開催する通年にわたる舞台芸術のフェスティバル「BITE」こそが、保守的な英国演劇にとって、ヨーロッパをはじめとするワールド・シアターの受容のウィンドウとなっているというのは、少しばかり皮肉である。

だが、やはり何かがおかしく感じられるのは、一つには、私のようなものが英国演劇に期待するものと、そこで創造される(あるいは、生産される)「産物」とのズレゆえだろう。

そもそも、大学3年生のときにはじめて英国を訪れて以来、何度かツアーリストとして、そして二度にわたる留学、その後は、仕事として英国演劇との接点をもってきた者が、何を求めて英国演劇を見続けているのか? ウェストエンドの華やかなミュージカルにはほとんど魅力を感じなくなってしまっているものの、私が英国演劇に求めているのは、「骨格がしっかりし、社会性・政治性を兼ね備えた緻密な新作戯曲」、あるいは「忘れられかけた近代作品のリバイバル上演」であり、そこに描かれた人間を表現する「過剰にならない端正な自然主義的なアンサンブル演技」であり、そして、それを社会に挑発するごとく仕掛けていく「プロデュース」のあり方であり、それを許容する文化政策と、演劇の受容層 - 観客 - の姿である。

自分に改めて問いただしてみると面白いのだが、日本の現代演劇に欠くものを求めているのに気づいて、つい苦笑してしまう。日本から英国に旅立った数多くの日本の演劇人が求めてきたのも、私が期待するものと多分にダブるのではないか。

だが、「伝統」と「格」を重んじ、クオリティを下げるわけにはいかない「エスタブリッシュメント」としての演劇学校は、外国人に門戸を開くことは極力限ってきた。台詞劇の伝統と、倍率からすれば、英語を母国語としない外国人が入れないのが当然なのだ。夏休みやイースターなどに開催される短期のワークショップなどでも、クオリティ・コントロール、つまりはオーディションが付加され、受講することすら容易でない。日本の演劇人にこれを説明しても理解してもらえないことが少なくない。ここでは他国でのキャリアはたいした意味をもたないのである。少なくとも言葉のできない外国人が、「選抜」され、さらなる高みをめざして切磋琢磨する集団の足をひっぱることは許されない。思い出したのは、留学当時、大学院の学部長が言い放った言葉である。「君たちは英国人でもできないことに挑戦している。留学生といえども、英語のできないものを許容する場ではない」。悔しかったが、事実だと唇をかみ締めた。

かといって、窓口が一切開かれていないわけではない。むしろ、ビジネスという側面が

らは、外国人の演劇人たちは、演劇学校や大学の演劇関連学科などにとって、魅力的な存在である。EU諸国からの留学生に対しては内国民待遇が保障されているが、日本など非EU圏からの留学生たちは内国民の2.5倍近い授業料を落としてくれるからである。

実際のところ、「伝統」と「格」を下げないように維持しながら、どのようにその「現金収入」を獲得するかが、演劇学校や大学のビジネス戦略の課題となっている。ワールド・シアターや英国演劇の動向を視野に置いたうえでといえば、カッコいいが、ネガティブに言い換えれば、苦肉のビジネス・プランとして、外国人をターゲットとして見据えながら、少なからぬ演劇学校や大学が導入し始めたのが、まさに「フィジカル・シアター」の専門課程なのである。その広がり、ある種、ブームであると言ってもいい。

英国人の若い世代にとっては、メインストリームのお高くとまった演劇のあり方に - 憧れとともに - 不満を持っているものもいる。もとよりテクノロジーに育ち、コンプリシテなどに熱狂した世代であり、「フィジカル・シアター」を学ぶことは、魅力的なオプションである。演出家のエゴの露呈に過ぎない実験的な成果に留まっている公演も、フィジカル・シアターをメインとして学んだ俳優たちが増えれば、それなりに違ったものへと発展していくのかもしれない。一方、密かにターゲットとされている(?)外国人たちには、本来学びたいものとは若干ズレるものの、有名校の「演技コース」には入れるものではないために、妥協しうるオプションとなる。学ぶ内容以前に、英国に留学し、本場の演劇を学んだとプロフィールに記載すること自体が主目的であったりするのは、どこでもある話だ。とにもかくにも、学校にはいったほうが学べるし、自分が望まないものから新しいものが生まれる可能性もある - 自分で自分がきちんと見えていることは必ずしも多くない。

そんななかで、ある名門演劇学校が2年後開講をめぐりに、「インターナショナル・アクターズ」の専門課程を準備しているという話を聞いた。すでに俳優としてのキャリアを持っているものにとっての修士課程的留学、研鑽の場として計画されているが、面白いのは、英国演劇50%、英語50%のカリキュラムが組まれる点である。外国人留学生の「市場」をよく理解しているといえるのかもしれない。しかし、いうまでもなく、この新しいベンチャーの成功のカギを握るのは、そこに集まってくる人材の「クオリティ」である。誰でもいい、誰でもなれるのではないというのは、この職業の根幹である。

ともあれ、「身体性」という意味では、英国演劇は過渡期にあるといえそうだ。この過渡期がどのように成熟の歩みを進めるのだろうか？ 演劇における身体性の発展が、「社会性・政治性を備えた骨格のしっかりした新作戯曲」と「自然主義的演技」という英国演劇のアイデンティティをかえって、損なうことになりはしないだろうか？ 基礎としての自然主義的演技のできぬ俳優なんぞは役に立たないとばかりの、メインストリームからの「反撃」が起こるのだろうか？ あるいは、所詮、身体性やヴィジュアル性はよその文化からの借り物、一時的ファッションに過ぎないものとして、いつか自然消滅してしまうのだろうか？ 文化政策はいかに考えるのか？ いやいや、文化政策よりも何よりも、観客が変われば、あるいは世代交替が起これば、確実に演劇は変化せざるを得ない。フィジカル・シアターはその一つの道を獲得していくのだろうか？ 疑問が尽きないというところが、まさに過渡期ゆえんだが、そのなかで、最も大きな疑問は次のことである。

「演出家の『構成・演出』、あるいはカンパニーによる『ディバイジング』の成果というのが、フィジカル・シアターの一つのパターンだが、そもそも、劇作家たちが、この創造の構造や、ブームなりをどのように感じているのだろうか？」

台詞劇が劇作家を主役とする演劇であったとしたら、フィジカル・シアターは俳優の身体を主役とする俳優の演劇になるのか？ かつて、ロイヤル・シェークスピア・カンパニーやジョイント・ストックが、「民主主義的」集団創造を夢見た結果が、産婆・コーディネーターとしての「演出家」の存在を、ある意味、不当なまでに大きくした。集団的創造ゆえに、かえって演出家の名前を表にだすことになったのである。それを理解し俳優や劇作家への尊敬をもって対処する演出家もいるが、エゴゆえに成果を独り占めしてしまいかねない演出家の存在も残念ながら少なくない。劇作家の言い分が知りたい。

(なかやまかおり / アーツコンサルタント)

## 編集後記 - 政治と文化

日本と同様、少しばかり暖冬のロンドンを訪れていた3月6日、歴史に残るかもしれないテート・モダン美術館で一大ポリティカル・イベントがありました。ロンドン周辺の主な芸術文化団体のトップたちを一堂に集めて、退陣を間近に控えたトニー・ブレア首相が演説を行ったのです。

ブレア政権が誕生したとき、私は英国留学中で、選挙を控えて、演劇人たちが話していたのが、「労働党は芸術をわかっているわけじゃない。保守党は芸術を理解しているが、カネをくれなかったけど。でも、保守党の時代が長すぎたので、いまは変化を必要としているんだ...」といったことでした(ついでにいえば、ブレア政権を誕生させることになった総選挙の取材の通訳として、総選挙の裏側を少しばかり深く見せていただいたので、その時代の空気をいまでもしっかりと記憶しています)。

あれから、10年の時がたったわけですが、自らの退陣を控えて、ブレア首相そのひとが、文化について語るのに、少なからぬ人々が違和感を抱いたように感じているようです。演劇関係者に話をきくと、「イラク戦争のために自らの幕を引くことになったブレアが、歴史にポジティブな存在として刻印を残したかっただけ」と、シニカル。ブレア首相そのひとが、現在の芸術文化状況を作ってきたわけじゃないというのが、正直なところなのでしょう。

たしかに、ブレア政権誕生後、英国経済の回復は著しく、映画大臣の設置を皮切りに、「クリエイティブ・インダストリー」「クール・ブリタニア」の掛け声とともに、芸術文化の産業化が急速に進められてきました。助成金が少しばかり増えたり、芸術に進学する若い世代のための奨学金が復活したりとそれなりの政策的影響が生まれているのも事実ですが、一方で、いい意味でも、悪い意味でも、芸術文化の道具化は、いっそう進んでいるかにも見えます。皮肉なのは、その直後に、アーツカウンシ

ルへの政府補助金の削減が発表されたことです。

それにつけても、少し羨ましく感じたのは、断末魔のブレア首相が、芸術文化を選んだという見識というのか、政治家の文化度です。文化というのは、攻撃されにくい分野だからかもしれませんが、日本の首相が辞める時、誰が芸術文化の演説をするのでしょうか？ 芸術文化への足跡がどれだけ社会的に評価されるのでしょうか？

トニー・ブレアの演説全文は次のWEBサイトからダウンロードできますので、ご参照下さいませ。

<http://www.guardian.co.uk>

Blair's speech on the arts in full で検索下さい。

(歴史はこのスピーチをどのように記述し、評価していくことになるのでしょうか？)

新しい年度の始まりですが、これまでつねづね地域の声がとりいれた内容にしていきたいと考えていたのですが、今回は、岡山で活躍されている大場真護さんに執筆いただきました。「その場」で感じるということの大切さは、東京や海外から送り出される芸術家たちにときに欠けていることかもしれません。自分のやり方に固執しすぎることも問題でもあります。もちろん、地域の方々が芸術家たちの思いを少し乱暴なまでに無視してしまうということもある「その場」で感じるということ、そして、それを対話することの必要性を実感させていただきました。対話という意味では、シルヴィア・ダウ女史の言う「コンサルテーション」も然り。感じるにしても、決めつけちゃいけない、まずは聞く耳をもつことなのかもしれません。

2007年度は、個人的な気分としては、少しばかり八方塞りの感があるのですが、それでもこれまで以上に広がりをもった多彩な事業を展開していきます。本年度も何卒よろしくお願い申し上げます。(なかやまかおり)

# theatre & policy

特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク(TPN)

国際化時代の多様な文化という視点に立ち、舞台芸術関連の様々な職業のためのセミナーやワークショップをはじめ、調査研究、情報サービス、コンサルティングなど、舞台芸術にかかるインフラストラクチャー確立をめざすヒューマン・ネットワークです。国際的な視野から、舞台芸術と社会との関係性の強化、舞台芸術関連職業のトレーニングの理念構築とその具現化、文化政策・アートマネジメントにかかる情報の共有化、そしてメインストリームシアターとコミュニティシアターの相互リンケージを目的としています。

2000年12月6日、東京都よりNPO法人として認証され、12月11日、正式に設立されました。

## theatre & policy シアター & ポリシー

TPNの基幹事業として、2000年6月から定期発行(隔月間・年6回)されています。定期購読をご希望の方は、TPNの準会員としてご参加下さい。

年会費3千円(送料込み)を下記までご送金下さい。尚、送金の際は、ご住所・氏名・電話番号を忘れずにご記入くださいようお願い申し上げます。

郵便振替口座 00190-0-191663

加入者名 シアタープランニングネットワーク